

# 沖縄に基地や軍隊はいらない

「4・29集会」報告

「沖縄で、20歳の女性が元海兵隊員の米軍属によって性暴力を受け、殺害遺棄されてから、4月29日で2年が経ちます。昨年12月1日、那覇地裁で被告は無期懲役を言い渡されましたが、12日に福岡高裁那覇支部に控訴しました。痛ましい事件を二度と起こさないためには、米軍や軍属の特権意識を助長する日米地位協定の抜本的改正と、「一日でも早い基地の撤去」がなされなければなりません」（4・29集会チラシより）

## 辺野古ゲート前500人結集行動

「沖縄の元海兵隊員による性暴力被害から2年／基地・軍隊はいらない！4・29集会」（4月29日、東京・全水道会館にて開催）の定員163名の大会議室は満席であった。折しも沖縄では本集会の前日28日まで「辺野古ゲート前連続6日間500人結集行動」（主催 向実行委員会）が行なわれた。名護市辺野古の米軍キャンプ・シュワブゲート前では、辺野古新基地建設に反対して連日座り込む数十人の市民を機動隊が一人ひとりごぼう抜きで排除し、石材などの資材を運ぶ10トンダンブや生コンミキサー車など約300台が日曜日を除いて毎日ゲート

野澤 信一



ト内へ入っていく。しかし400〜500人が集まる月1回の集中行動日には機動隊も諦めて、資材の搬入は中止されてきたという。このため、今回の行動は連日500人以上がゲート前に結集し、工事を完全に止める「奇跡の一週間」を実現しようというもの。報告によれば、ほぼ連日700名余の市民が結集し、1500名が結集した最終日には機動隊も姿を見せず、車両の搬入も行なわれなかった。しかし初日こそ約5時間にわたって工事車両の入構を阻止したものの、翌日以降は警備にあたる機動隊員も大幅に増員され、座り込みスペースも警察車両で塞がれるなど、非暴力を貫く座り込みは次々と排除され、工事を完全に止める「奇跡」は果たせなかつ



辺野古ゲート前連続6日間 500人結集行動実行委員会ホームページより

た。本土から初めて座り込みに参加したという学生は「座り込みで工事を止めることはできない。しかし工事を遅らせることはできる。沖縄の人たちは自分たちが今できるすべてのことをしている。沖縄の人たちが体を張って工事を遅らせ、新基地建設や大浦湾の環境破壊が取り返しのつかない状況になる前に、本土のぼくたちが何とかしなければいけないと思った」とよくに語った。

実は本集会のメイン・スピーカーであった高里鈴代さん（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会共同代表は、このキャンプ・シュワブゲート前での抗議行動の初日、機動隊に押されて将棋倒しにされ、左鎖骨と肋骨4本を骨折する大けがを負われた。このため、高里さんと共に同「女たちの会」の立ち上げメンバーで、2000年から同事務局長をつとめている源啓美さんが高里さんに代わって急遽上京し講演された。

## 彼女は「私」だったかも知れない

2年前のこの凄惨な強姦殺人事件は、特に沖縄の人びとにとっていまだに深い悲しみと怒りなしに語ることはできない。昨年3月の市民意見広告集会の講演でこの事件に触れた映画監督の三上智恵さん、本年4月26日の沖縄意見広告全国キャラバン隊歓迎の集いで報告した、3年前に沖縄に移住したという若い後藤ジョオくんと同様、源さんも話が被害女性に及ぶと声を詰まらせ、沈黙が会場を包んだ。

表沙汰になる性暴力は氷山のほんの一角である。強姦は親告罪だった（2017年6月、非親告罪に変更）ので、被害者が訴えない限り事件にはならなかった。また事件の表面化に伴うセカンド・レイプへの恐れなどから、多くの被害者は訴え出られず、沈黙を強いられる。普天間基地「返還合意」のきっかけともなった、沖縄米兵による少女暴行事件に抗議する沖縄県民総決起大会に8万5千人が集まったのが1995年。「あの時、もっと自分たちが頑張って基地をなくしていたら、今回の彼女の事件は避けられたのではないか」と沖縄の人たちは自分を責める。

被害者の遺体発見後4日目、喪服に身を包んだ1500名の女性たちによる追悼・抗議集会が持たれた。集会の主催者はプラカードをつくるにあたり、「どんなに怖かったろう」「どれほど苦しく、無念だったろう」と思うと涙があふれ、適切な言葉が見つからなかったという。その結果、沖縄では「亡くなった人の魂の化身」といわれるハーペール（蝶）の絵柄をボードに掲げて在沖米軍司令部の前を無言で行進し、沈黙で怒りと悲しみを訴えた。



源さんは「彼女の死は日米両政府の無作為の罪である」と断じ、「もし被害者があなただつたら、あなたの妻、娘、孫だつたらと想像してみて下さい」と痛切に訴えた。

### なぜ軍隊で性暴力が起きるのか

基地のフェンスを切り裂く「象徴」としてのベンチを手に、ゲート前抗議行動にたびたび顔を見せる元米軍海兵隊員のダグラス・ラミス氏は「兵士の仕事は人を殺すこと。しかし誰でも普通の精神状態で人は殺せない。軍隊は敵を差別し蔑視する暴力的精神構造へ再教育する」とし、それが沖縄への差別と女性への蔑視ひいては性暴力につながっていると指摘。英国人ジャーナリストのジョン・ミツチェル氏は、海兵隊の新任兵士向けの「沖縄の文化認識トレーニング」と称するプログラムの「沖縄の新聞は米軍に敵対的」「沖縄人はなまけもの」「軍用地料が沖縄の唯一の収入源」「米兵は、外人パワーで女性にもてるので要注意」などと、偏見と占領意識を刷り込むような教育を暴露。またベトナム帰還兵のアレン・ネルソン氏は「兵士が外出するとき、暴力だけを基地の中に残しておくことができるだろうか？ 兵士」と共に「暴力」が街を横行する」と言っている。

の女性は基地内の米兵に対し（ここは沖縄の土地の境界線です。許可のない立入りを禁じます！——沖縄の住民の命による）という手書きの看板を並べて抗議している。

### 悪化の一途をたどる沖縄

オスプレイの「不時着」、米軍機部品の保育園や小学校校庭への落下など、最近も基地に起因する事故が多発している。米軍機の窓枠が校庭に落下した普天間第二小学校では、生徒が校庭にいる間は常に上空を監視し、飛行機が校庭上空を通過する際は校舎内へ「退避」させているが、これが一日最大23回にも及んだという。部品が落下した保育園には「わざと飛行部品を園内に投げ込んだのだろう」という誹謗・中傷の電話が殺到した。

辺野古の工事進捗状況は全体から見ればまだ数%に過ぎないが、辺野古側の浅瀬埋め立て区域を囲む護岸工事は6月にも完成し、その後内部へ土砂を投入する予定と言われている。土砂を投入すれば環境破壊は決定的となり、二度と元には戻らない。南西諸島（石垣島、宮古島、与那国島、奄美大島ほか）の要塞化も着々と進んでいる。

「米国云々以前に、これは日本による沖縄差別そのものですよね」と問いかけてきた若者の真剣な眼差しが忘れられない。

（本稿は「基地・軍隊はいらぬ！4・29集会」での講演と配布資料を参考に、本誌の責任でまとめたものです）  
（のざわ・しんいち／本会事務局）